松平伊賀守・同組十人切組之内
　　　　　　　　　　　　石尾金之助
右検使増田五左衛門
水野監物・同組九人切組之内
　　　　　　　　　　村上三大夫
　　　　　　　　三村彦右衛門
御徒目付道役人御任ニ付松平伊賀守宅へ集り候目付
後藤吉太夫　　新戸十太夫　　上田五兵衛　　新井伝右衛門
堀田勘右衛門　　稲葉又右衛門　　太田彦右衛門　　荒川権兵衛
松田与十郎　　伊藤永三郎

同心人目付七人
同使之者十人
　　松平伊賀守家来
　　　　吉藤平左衛門
　　後藤源右衛門

右御理吉良騒動之節御検使一件之書物数通年数
出来及散乱候故修補之書物数之内紛失有之一
紙写留置者也

于時歲次丙午弘化三年春三月　大窪光茂寫

義人遺事

義人遺事

幹志云元本以此巻為初巻今改為二巻目

直矩以下二冊　堀部筆記

巻二

元禄十四年巳年三月十四日於
御城内匠頭吉良上野介意趣有之　梶川與惣兵衛組留候之内匠頭儀田村
右京大夫殿へ御預ケ同日之暮方ニ切腹被　仰付候

一　上野介死生不分明ニ候得共手きず養生難叶共可死去なと
承り届候ニ付家中之者共存寄もとかく申内ニ浅野監物殿越内匠
頭殿屋敷騒動無之様ニ可申付旨ニ候　依付由申　半刻ニ付　同列戸田采女
正殿浅野美濃守殿ニ以後監物殿依頼之ニ戸田采女正殿浅野美濃
守殿同大学列ニ書付を以　仰候之趣浅野美濃守ニ讀之
御野内匠頭吉良上野介ニ意趣有之由ニて　於

茨城大学図書館
登記番号 73-8883
昭和49.3.30 編入

殿中理不尽ニ仕形折柄とハ不届ニ思召候之旨被知候 以上今晩
切腹被 仰付、家中の者若輩ニ相成出来仕候、親類共ニ相
拙り可申哉之旨被 仰付候、此時帯畏、上意請申上る

一 田村右京大夫殿ゟ御届有之候、内匠殿切腹被 仰付置家来共死骸
死骸請取候様ニ被 仰付候ニ付用人糟谷勘左衛門、留守居建部喜六
内記、用人片岡源五右衛門、其外田中貞四郎、磯貝十郎右衛門、小納戸役中
村清右衛門、右之者死骸請取候て菩提所たる高輪泉岳寺へ送葬
安井彦右衛門、藤井又左衛門両家老共死骸を請取候場所并泉岳
寺之も不参哉、右之者共は不心得
於泉岳寺四人共落髪片岡源五右衛門、田中貞四郎、磯貝十郎

右衛門中村清右衛門 右両人一旦赤穂へ参哉
一儀ニ付赤穂へ罷追候由申出候、然し共内匠殿仕置を武斗士之心得ニ可有之候
殊ニ当の儀江戸両家老共方ニ後ニ承申候、結句赤穂近国之家中より
赤穂の縁家ハ申ニ不及、赤穂取存候て猶更ニ浅野の家の者ニ依之家
老大石内蔵助ニ大野九郎兵衛両人ニ毎日毎夜篭中談し候、内蔵助ハ腰ヲ付
不行届ニ候て執着ニ用人数々対談有之内志の通ニ申候
主人右落手切腹被 仰付、尤籠城仕候て八城ヲ滞り候ハゝ何方へ面ヲ向
可申様も無之候、但公儀ゟハ上杉殿ゟ引取候とも申し其之恐ハ有之候以後本
意を遂て可致討ハ存得之候処、成る程之城請取ハ成り申候、自
滅の場ニ及事ニ至候、只様ニ可申候て立まで、一分立候様ニ被 仰付

深く立入候ハヽ各方の儀若此後道理出来候ハヽ当城於蛮ニハ内匠頭菩
提所於花岳寺志の為ニ追腹可仕其節他より何事有るべからず
と各ニ存念承り候若共確し　大石内蔵助を始て当浅野内匠頭の内
不申の者し日ニ於て　相談不相調候之指図役家老総浪人追出し候
ハ今程ニ而日々相談不相調日を過る而家中の毒ニ存し候ハヽ仁ハ
時を待て相談じ寄合の上赤穂并ニ当地指図可仕儀て其共併せし

赤穂於花岳寺追腹と合者共

播州　奥野将監　　　　大石内蔵助
播州　河村伝兵衛　　　同　原惣右衛門
同　小山源五右衛門　　同　近藤源四郎

弐六人

一　江戸ニて落合候者ハ　堀部安兵衛　田中貞四郎　磯貝十郎左衛門　右三人内蔵介

前へ申出し面ニハ格別の人柄かるべし　八一儀同意ニ心底承届候とし
所三人共我等共ハ存分忠義一儀承知申合候　退散し人々しハ
退去候て能々存念有之て一同の所存極りかたきニ相違なる旨申聞候ハ
存分存念有之て見届候然らハ江戸ニ於て上野介へ志有りと思ハ
左ニ罷出候主君の一七日まで待ち江戸表を立退き墓所の前ニて
相果候様赤穂へ罷越候ハ何なりとも心得かたしと風聞して

一　大石九郎左衛門何方へも忍ひかくれ御中ニ相見えたり　一人逃出
ける将郡（？）ニ待つ申し聞し逃して堀部を捨置て何方へか落行けり

一　本家へ相て逃ケたる段　其外色々諸浪人数多ニて相成
引渡し先キ通して以使者申来り候ハ浅野内匠頭内縁の者

公儀江御伺有之候處右之事ニ付而者格式為ニ仕候ハハ不叶儀ニ候得共作法
統迷ニ至地引拂ニ付以肝要ニ存尚此方可致候もの也
巳四月三日
戸田采女正印判
浅野内匠
家老中
番頭中
用人中
目付中
惣家中

一 赤穂江同日 御目付荒木十左衛門殿榊原采女殿上内蔵助方へ為被
書を以江戸より申上候江戸ゟ指越候両家老共ハ存寄有之候由堅く
申遣候同月廿日中ニ至ル戸田采女正殿清面一ヶ通ニ付右之中ニ多川
九左衛門月岡治右衛門両使ニ申含候以江戸表同月付中宗也江戸表差
江被成候依之江戸ニ而右家老共ハ一儀委細ニ申含右安井彦右衛門藤井
又左衛門馳参り戸田采女正殿へ右之趣戸田采女正殿より致啓通し置候
付江戸ニ而大学殿ハ内匠の家老共ニ存寄ノ一儀ニ而付て首尾能城引
渡候様大学殿よりも右使ニ江戸御差図ニ而両使ハ赤穂へ致着候趣内蔵助申
ヶ様之式有之候而ハ承知ニ不通ニ諸侍ニも左様ニ存候得共両使ハ申含
致候ニ付諸侍ニ共ニ任大学殿ハ両家老共ニ罷出候而伺ゟ筋
城付之儀目の前ニ備ニ大学殿指図の取ニ有之候ハハ諸侍ニも一分之立候筈之
学殿ゟ身上ニ滅亡ニ成候名跡之断絶ニ至らし然らハ此度の籠城可止

以後所存可申遣候処、曽角大学殿一面目者之（人家も）不残頼ニ付
左候共時節を待可然と存候儀ハ無正也
多川九左衛門月岡治右衛門以両使江戸表ニ申遣候趣ハ
今度内匠頭不調法ニ付而法式之通ニ被仰付、御尤奉畏候、然共上野介殿
御存生之由承候、然上ハ当城離散仕候（面々向ニ而相果候共此所不届）
家中一同之存念ニ候、然者当地之教訓仕（其内存念ニ而可有之候）ハ
取引仕候得共、若離散仕候而可仕節ニ候得共、御家之大ニ候得共
奉封上野介根元無存念可存候（其様当城離散可仕候）
此段申遣候、江戸両老（安井彦右衛門・藤井又左衛門）相談之上、拙者共承知ニ江戸
之家老中川甚兵衛・安藤次高田郡兵衛（両人を以）承知ニ付承知致

右之者共存念両様ニ候、然共納得不仕候ハヽ、是非共付而（一同）上り之候ハ
有之候得共、両使中上ニハ何分共存念之願も内意ニハ承引仕可被成
右ト存候何分も存候者共、其内書面を以被仰候、此以後之儀付之可被為
右之儀承候得共、此以後之時分ハ内書面ニ而御返答之文言
多川九左衛門月岡治右衛門以両使書付持参 ハ 紙面之趣家中
之面々無異儀ニ至ニハ内意地不相成内匠旧来之事
公儀御役人衆御存之通ニハ内匠家中其外之節ハ
地引、城渡滞無之様ニ申遣候　乙儀内匠旧来之存念而相済
申不及（其節）拙者共（存念之口上）承届候
要之事ニハ、此者家中之面々之存念而も納得之者也

巳四月五日　　　　広田采女正印判

御城内近
家老中
番頭中
用人中
目付中
惣家中

追而当地ニ続合候而茂其段宗ニ申者ニ段中諸事ニ及ひ候とも
外ニ而候ハヽ出口ニ而可被相渡候事

一内匠頭目録　上方表ニ於而存分被仰付事ニ　嫡子播磨　信州在所
上ハ存念ハ無之事ニ候ハヽ然る上ハ其所を去り城中を渡可申我内匠頭来
之存念ニ　右は家中の者共忠節と存候　右目付中雑夜可有之定而
可達　上意ハ然ハ大学殿右一門之面々不宜之と存候者之面々ハ
家中之者共納得可仕候とも存候皆共如何可致候哉と御使ニ付而
臣之存念ハ右之意を致承知然共所之者共ハ存念候哉急々難計
奉存ハ其先右之意を致可申候間右様申上候とも
道中追付右目付中ハ不申上候両使口上之趣凡当之事可有之候
ハ右通為被仰越候得共采女正殿ハ赤穂之家中　右使者を以
被仰付候書之文言両使江申世宗荒強事ニ而候
此者多門丹後守田中大隅守両使到来下中城引渡之家来之者ニ而
一以前之通今又ハ存候得共其元之者共之備ニ右当地不案内故又